

教育事務所だより

平成 28 年 12 月 28 日発行

家庭学習の質・量の両面で改善を図るために

～全国学力・学習状況調査に係る中学校管理職説明会から～

去る10月24日、松江市・安来市の中学校の校長先生方を対象に、全国学力・学習状況調査の結果説明を行いました。その後半では「家庭学習の質・量の両面で改善を図るために」というテーマで校長先生方に熱心に協議いただき、参考になるご意見を多くいただきました。その一部を紹介いたします。

【指導方法の工夫】

- 「次の授業までにやってくるように。」という形で宿題が出されることが多いが、生徒の状況を考慮しながら、短いスパンで取り組む出し方や少し長めのスパンで取り組む出し方などを工夫してはどうか。
- 基礎・基本を身に付けるための宿題と、応用力を付けるための宿題をバランスよく出すことが必要である。
- 自学自習は難しい面もある。例えば、課題プリントを準備し、できることに取り組んだらほめる等の働きかけもしていきたい。

【組織としての取組】

- 家庭学習の習慣化、授業づくり、キャリア教育、主体的な学びづくりなど必要な取組を関連づける組織の整理が必要である。例えば、教科担当を複学年で受け持つ、研究部・教務部・学年部での共通理解に基づいて家庭学習の指導を行う、家庭学習推進の担当者を校務分掌に位置付ける等。
- 管理職が方針を示しながらボトムアップの仕組みをつくる。



【授業改善】

- 授業と家庭学習をつなげたものにする。例えば、予習や宿題を授業に活用する等。
- 生徒が主体的な学びができるよう、教師主導の授業を改め、教師の授業力向上を図る。授業の中で宿題を出すだけでなく生徒が家で勉強したくなるためのしかけをつくる。
- 家に帰ってからも進んで学習したくなる授業について掘り下げて考えていきたい。

【家庭との連携】

- 「教育情報誌」の「家庭向け」を、保護者に配布するとよい。
- PTA活動との連携を図る。
- 保護者の啓発に「親学プログラム」を活用する。
- 保護者連携は、家庭学習に関しては必要ないのでは。学習指導は学校の仕事。家庭に協力を求めるのはどうか。

《特別支援教育研修会のご案内》 主催：島根県教育委員会 主管：松江教育事務所

平成 29 年 2 月 2 日（木）14：30～16：30 松江合同庁舎 601 会議室

「障がいのある児童・生徒の自立と社会参加をめざして～相談を通して～」

講師 石橋美恵子 氏〔島根県東部発達障害者支援センター（ウィッシュ）センター長〕

※通常学級担当の先生もぜひご参加ください。詳細は配布済みのチラシをご覧ください。



「子どもの声でつくる算数授業」をめざして

今年度より、「算数の勉強が好きだ」という子どもを増やすことをねらいに、算数授業改善推進校事業がスタートしました。松江市立古江小学校、安来市立社日小学校を推進校とし、授業リーダーを中心に「子どもの声でつくる算数授業づくり」に取り組んでいます。新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められます。「子どもの声でつくる算数授業」と共通するところも多いと考えています。2学期は、その取組の成果を管内の小・中学校に公開していただきました。

子どもの声でつくる算数授業

- 子どもが「算数の勉強は好きだ」「問題を解いてみたい」と思う授業
- お互いの考えを伝え合うなど、それぞれの考えが深まっていく全員参加の授業
- 子どもが考えること、やりきることを楽しむ授業

安来市立社日小学校の取組

■子どものつぶやきを生かす

社日小学校は、子どものつぶやきを生かし、「子どもの問題」から出発する授業をめざして実践に取り組んでいます。



5年「面積」では、底辺の長さが等しい長方形と平行四辺形を見たときの気づきをもとに、「2つの図形の面積は同じなのか？」という問いを子どもたちが見いだしました。「解いてみたい」という意識の高まりにより、自分の力で面積の求め方を考えようとする姿がたくさん見られました。

■単元でつきたい力を明確にする

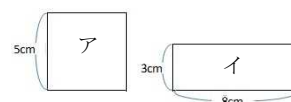
“目の前の問題”を解く力だけではなく、子どもにどのような力をつけるのかという視点で授業をつくり、「自力挑戦」ができる子どもを育てようとしています。そのために、「単元でつきたい力」を指導案上に明記して授業を行っています。今後、数学的な「見方・考え方」が重視されていく方向性とも重なり、参会者への示唆に富むものとなりました。

松江市立古江小学校の取組

■「対話」を通して考えを深める

古江小学校は、「対話」のある授業に取り組んでいます。形式的にペア・グループ対話を行うのではなく、対話を通して子どもが考えを深めたり広げたりすることを大切にしています。

4年「面積」では、右のような四角形の広さについて考えました。



- C₁ まわりの長さはイが長いから、イが広い。
C₂ 四角形の中に「○」をかいたら、アには25個、イには24個入ったから、 $25 - 24 = 1$ でアが広い。
C₃ ぼくは、重ねて切ってみた。そうしたら、アの残りのすきまが(1辺が)1cm(の正方形)だった。
C₄ C₂さんもC₃さんも、答えが1だ。
C₁ C₂さんは、四角形の中に入っている「○」を全部数えている。ぼくは、まわりのほうだけを考えていたんだと思った。

授業記録をもとに作成

子どもたちは、このような「対話」を通して広さの意味を深く考えていきました。さらに、「○」や「すきまの1cm」など、 1cm^2 につながる考えにもふれることができました。



みんなで授業改善を！

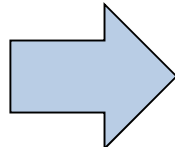
安来市では、社日小を会場として「算数・数学授業力向上研修」を開催されました。つぶやきを生かそうとする授業者の姿は中学校の先生の参考となり、また、中学校の先生の専門性は小学校の先生の参考となり、とても充実した研修会となりました。算数・数学が好きなお子を増やすために、校種をこえて、どの学校でも授業改善を進めていく取組が広がることを期待しています。

算数・数学の授業改善について、文部科学省HP「算数・数学ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」等もご覧ください。

総合的な学習の時間の展開 ～鹿島中学校の「探究型の学習」の事例～




鹿島中学校では総合的な学習の時間を「ピ鹿中^{カキ}タイム」と名付け、これまでも様々な体験活動を取り入れた学習を展開してこられました。今年度、第7回松江市教育研究大会Aブロック研究会において、1・2年生の総合的な学習の時間を公開することになり、生徒主体の探究型の学習となるよう見直しを図られました。

- 年間の単元数が豊富で、それぞれの単元に当てる時数が少ない。
- 体験活動が中心で、活動を通して自分の生き方に目を向けるところまで深まらない。 など



- これまでの体験活動を生かす。
- 「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現→」の一連の学習過程を重視した探究の流れにする。
- 特に「整理・分析」を大切にする。 など

《「人とまちと未来をつなぐ！Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」のⅠ（1年生）の部分》

4・5月	6・7月	8・9月	10・11月	12・1月	2・3月
【テーマⅠ】人とまちと未来をつなぐ！～「ふるさと鹿島」の再発見！					
「ふるさと鹿島」の自然と産業にふれよう	「ふるさと鹿島」を知り、工夫して、広めよう！			「ふるさと鹿島」の特産物を学ぼう	
<p>くめあて></p> <p>地域の自然、産業を守り、支えている人たちの思いに気づき、地域についての理解を深める。</p>	<p>くめあて></p> <p>地域活性化に向けて、他地域と鹿島とを比較しながら、地域の魅力を再発見し、地域の人たちにその魅力を発信し、広める。</p>			<p>くめあて></p> <p>もの作りで地域の魅力を伝えようと取り組む人たちの姿から「ふるさと鹿島」の魅力を再発見する。</p>	
					

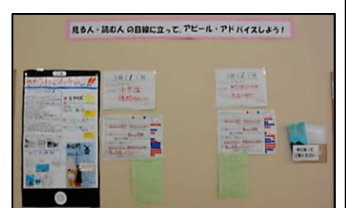
- 鹿島町の「ひと・もの・こと」に目を向けるきっかけとする。
 - ・出身小学校での地域学習の経験を把握
 - ・例年実施してきた地域にある施設の見学と体験活動、清掃活動
- 「ふるさと鹿島」の現状を知り、活性化したいという意欲を高める。

- 例年実施してきた旧松江市での体験活動を「鹿島につなげよう」という視点で行い、旧松江市と比較しながら鹿島町を見つめる。
- 一人一人の気づきや願いを基に全員で今後の学習課題を検討し、「鹿島のことを知って、工夫して、広めよう」と共通の「課題の設定」をする。
- 共通課題を一人一人が自分の課題として受け止め、地域の「ひと・もの・こと」について調べる「情報の収集」を行う。
- 調べたことを、「誰に」「どのように」伝えようと効果的であるかという視点で「整理・分析」を行う。
 - ・互いの取組を検討する場面を設定する。
 - ・日常的に情報交換ができるよう学習の足跡や成果物を掲示する。
- 自分たちで選んだ方法で「まとめ・表現」し、地域に発信する。

- 地域の魅力について探究し、2年生の「課題の設定」につなげる。



気づきを基に、全員で共通課題の設定



成果物を掲示し、日常的に情報交換

総合的な学習の時間を生徒主体の探究型の学習で展開されたことで、生徒自身が活動を通して自分の生き方に目を向けている姿が多く見られました。

『ふるさと教育を想う』

皆さんは、丸岡忠雄さんの詩『ふるさと』をご存知でしょうか。「ふるさとをかくす」ことを父はけものような鋭さで覚えた」で始まる詩です。この詩は、丸岡さんが、長男誕生の1965（昭和40）年に同和地区に生きる父親の願いをこめて書かれました。

そして、十年後に書いたといわれる詩が左記です。同和对策事業の実施や義務教育諸学校の教科用図書は無償化実施、中学校・小学校の社会科教科書に「同和問題に関する記述」の掲載、「全国高等学校統一応募用紙」の制定などもあり、同和問題に対する理解が図られつつ、学校での同和教育が進められました。現在は人権という確かな価値観のもと、あらゆる差別解消へ向けた取組へと行動が起こされています。

このような中、東日本大震災に起因する放射線被ばくについての風評に起因する人権問題が新たに生まれています。福島原発事故で“ふるさと”を離れて家族とともに生活する子どもが、避難先の通っていた小学校で名前に「菌」をつけて呼ばれたり「放射能」と言われたり金品を要求されるなどのいじめに

あい、死のうと思ったことなどを書いた手記が公表されました。その後もいじめを受けたり日常的に「菌」「汚い」と言われたりという情報が寄せられているといえます。

先にあげた丸岡さんの詩『ふるさと』は、同和地区で生まれ育ったことによる差別について書かれたものですが、今はこのような“福島差別”とも呼ばれる差別が生まれているのです。同じような“水俣病”による差別もいまだあるのです。

次の文章は、“ふるさと”を同和地区に持つ島根県の方のものです。

◎手記『出会いからの学び』

（前段省略）

私が生まれたところがたまたま同和地区だったのです。自分が選んで、そこに「生まれた」わけではありません。でも「そこに生まれた」「そこに住んでいる」というただそれだけの理由で、差別の現状を肌で感じるような出来事が幾度かありました。そのため、今もなお人前で堂々と自分が住んでいる所が言えないのが悲しい現実です。

（中略）

最近では、年齢を重ねたことにより、同和地区、地区外を問わずたくさんの仲間に恵まれ、その輪、和が広がり、出会うといつも笑顔になれる自分がいます。これからも多くの出会いを求め、人として、また人間として認め合い、孫たちの時代には決して私のような思いをさせたくありません。

（60代女性）

自分につながる先人が生まれ暮らしてきた地域の伝統や文化、業績を誇りに思いながら、愛すべきふるさとを隠さざるを得ない人々がいたのです。

私たちは、子どもたちへの「ふるさと教育」を行っています。地域では、地域を支える次世代の育成を目指した取組も進められています。従来から住んでいる人たち、他地域から来られた方たち等と一緒に暮らす中で、多様性（身体的特徴、能力、感情、家庭、地域、文化など様々な違い）についても学び、受け止め、一人一人がお互いの違いを認め、尊重し合うことが大切です。「人権教育の指導方法等のあり方について〔第3次取りまとめ〕」（文科省）には、「総合的な指導のためのプログラム例」（P24）としてこのことに触れています。

私たちはお互いの違いを基本として、自分の生き方につなげ、これからの“ふるさと”の姿を考え、地域の担い手となる子どもたちを育むためにも、あらゆる差別をなくしていこうと主体的に行動できる力が身につくよう取組を進めていきたいです。

時の貌（かお）

（前段省略）

きょう

学校で学んだという

部落問題を父に訊ねる

中学生になった吾子の

生き生きと澄んだ瞳に

もう ふるさとの重い翳りはない

無駄に流れてはいなかった

たしかな“時”の貌を

私は はつきりとこの眉に見た

（市民学習シリーズ七）

詩集

ふるさと

丸岡忠雄

より